

「信頼を「いただきます」」

広島県 宇田早織

ある日母と喧嘩した。

理由は覚えていないけれど、多分喧嘩するのもくだらない位の理由だったのは覚えている。そして悪いのは私だったことも。それでも無性に腹が立っていて、その日の授業もなかなか耳に入ってこなかった。

母なんて私を信じてはくれていない！私だって母なんて信じていないし嫌いだ!!と心にも思っていないのに、何度も何度も心の中で繰り返して、相手を罵る事でしか自分の怒りを抑えられない弱い自分が情けなくて少し目が潤んだ。

そして3時間目の保健の時間。

また先生の話に少し耳を傾けて思考を別の方に飛ばしている時、ある言葉が耳に入ってきた。

「お前何言っとるんじゃ。信頼しとるけえ、そいつが作った飯が食べられるんじやろうが。」

先生にとっては、気に留めることもない些細な言葉だったと思う。でも私は呆気にとられていた。

考えた事も無かった事にただただ、自分の行動を振り返っていた。

喧嘩して母が嫌いになってもご飯だけは必ず食べていた自分を思い出して、恥ずかしくなった。

なにを怒っているのだろうか。どんなに喧嘩して嫌いになっても、やっぱり自分は母を信頼していたのだ。でもそれを認めるのが嫌で目を背けていたのに、それをこんな形で知るなんて。

私は学校が終わると、家に向かって自転車を漕いだ。

母に朝言えなかった、「ごめんなさい」と「いただきます」と「ごちそうさま」を言うために。

「……ただいま」

「おかえり」

「……………ごめんなさい」

「…そうじゃろ？ アンタが悪かったんじやろ？」

ほら、母はいつも何処かで私が謝れるような「スキマ」を作ってくれる。あとは私がその「スキマ」に素直に入れるかどうか。

「いただきます」

その日のご飯は、朝よりずっとずっと美味しかった。